



深澤頭取(右端)と頼もしい協力者



「第1回引き出そう会」は団地内のカフェ「いこいのTappino」前を中心に開催



とくいの銀行をサポートするTAP事務局長の羽原康恵さん

「かんたんストレッチ教えます」のちよとくを体験して楽しむ深澤頭取(右から3人目)と井野団地にお住まいの方々



特集 2

取手
井野団地

茨城・取手市



住民の「とくい」を集めて共有
ユニークな“銀行”が人気

茨城県取手市にある取手井野団地。芸術家、深澤孝史さんが頭取を務めるユニークな銀行が営業中だ。預けたり、引き出したりするのはお金ではなくそれぞれの住民が得意なこと。「とくい」を共有する仕組みに、子どもからお年寄りまで、多くの住民が参加する。その中心にはいつも深澤さんの笑顔がある。

★以外の写真=大塚俊 取材・文=船木麻里

笑顔あふれる「引き出そう会」

寒空のもと、団地の一角にある広場で、何やら怪しい動きをする老若男女の集団を発見!

両腕を回しながら息継ぎするクロールの動きやコサックダンスのようなバタ足練習、「平泳ぎの深呼吸」の声に「ゲコゲコ」と言いながら、全員そろってガニ股のカエル足のポーズ。

昨年の11月、取手井野団地で行われた体験型イベント「とくいの銀行 第1回引き出そう会」。そのオープニング、陸上での水泳指導準備体操の「コマだ」。

イベントの指揮を執るのは「とくいの銀行」の頭取を務める深澤孝史さん。

イベントも中盤、旗を振る深澤さんを先頭に、女性8人の参加者が向かったのは、団地に住む高草木紀子さんの「豆所の収納や道具使いのアイデアを紹介する」というツアア。紀子さんが、たわし置き場の工夫を話し始めると、深澤さんが「ココじまん」と書いたボードを掲げて注目を集めた。

イベントのラストは子どもたちが中心となった会場ステージのリコーダーの演奏。こうして、この日、井野団地は多くの住民の笑顔があふれた。

お金ではなく得意を預ける

「とくいの銀行」とは、井野団地の住民が自分の得意なことを登録する仕組み。登録した人は、別の人が登録した得意なことを依頼できれば、別の「とくい」が引き出せるということ。「銀行」というネーミングにした。

仕組みを考案した深澤さんは静岡県浜松市在住の芸術家。取手市をフィールドにするアーティストの活動支援などを行う「取手アートプロジェクト(TAP)」のパートナーアーティストとして、定期的に取手に通う。

深澤さんの芸術家としての活動は、絵画や彫刻の創作や、音楽の演奏といったものとはちよとと違う。関わる人の特性を素材に、コミュニケーションを誘発させるプログラムやプロジェクトを展開するのが深澤さんの作品だ。「自分がやりたいもの、得意なも

実用的なものからユニークなものまで、こんな
“とくい”が集まっています!

※一部抜粋



**簡単な韓国語
教えます**

取手市在住の女性です。
簡単な韓国語です。

**下手な
ヴァイオリン弾きます**

大学生です。高3まで割と
がんばって練習していました。
全然うまくないですが、
楽しく弾きます。

鼻笛吹きます

とくいの銀行頭取が
鼻笛をあなたのために
吹きます。

こんぼう
**梱包バンド工作
教えます**

団地に住む主婦の方が
梱包バンドでわんちゃんや
かごづくりを教えてくださいます。

**アジアの
影絵芝居**

マレーシアワヤンの研究、
実践者がおはなしをしてくれたり、
ワークショップを
開いてくれたりします。

**本物のパンの
基本を教えます**

元パン職人の元気な男性。
いこいの横のパン屋にも
教えたことがあるとか。

**戦前と
戦後の話**

80代の男性
が戦前と戦後
の話をします。

**かんたんな
ストレッチ**

いこいのボランティアも
している男性。
健康維持のための簡単な
ストレッチをします。

**ひとりあそびの
やり方おしえます**

優しげだけどゆるい雰囲気のお
姉さん。どうしても、ひとりで
あそばないといけないときの、
あそび方をおしえます。

約180件も集まりました!

のを持つている人は多い。それを共有して新しいコミュニケーションの場を作るにはどうしたらいいのかと考えました」と深澤さん。「とくいの銀行」では得意の登録を貯金になぞらえて「ちよとく」と呼ぶ。現在は約180件も預けられているが、当初はかなり苦戦した。そこで深澤さんは自ら積極的に営業活動を行った。

散歩中の高齢の男性に「何か得意なことありませんか」と声を掛ける。「何もないよ」という返事があってもめげない。「でもよく散歩されていますよね。だったら散歩を『とくい』として預けませんか。『それならいいよ』」。

地道な勧誘に加えて、団地へ遊びにくる小学生の協力もあった。「プラモデル作りがすごい友だちがいるよって教えてくれて、その子の家に一緒に行って、『ちよとく』してもらったこともあります。彼らの営業ぶりは優秀で、今では欠かせない存在です(深澤さん)。

日常的に使える仕組みに

「ちよとく」を集めるだけでなく、

積極的に引き出してもらいうことも大切。冒頭の「引き出そう会」は、多数の「とくい」を一度に引き出して、住民全体で楽しむイベント。団地の活性化に加え、これをきっかけに1対1の取引も誘発していく狙いもある。

「今では、団地や近隣の人は芸術家の作品というより、自分たちが日常で使える団地の仕組みの一つとして楽しみながら活用し始めています」とTAP事務局長の羽原康恵さん。

個人の得意は、他人に言わなければ一人の趣味に終わってしまいい、周囲との交流は生まれにくい。「とくいの銀行」があれば、いままでも世間話しかなかった人も、趣味や興味に関する話をするようになり、交流が深まる。

『とくいの銀行』が、団地の潜在的な表現力をあぶりだして、住んでいる方々の生き方を変えるきっかけになったらうれしいですね。僕自身はそうした仕組みで、団地に無駄というか余白を作りたいことを楽しんでます」と深澤さんは笑顔で話す。